

「見よ、神の小羊」

ヨハネによる福音書 1:19-37

今日からしばらくの間、「ヨハネによる福音書」を中心に、主イエス・キリストの御業について共に学んでまいりたいと思います。

このヨハネによる福音書は、マタイ、マルコ、ルカという他の3つの福音書と同じように、イエスさまの為さったこと、語ったこと、十字架の死と復活について記していますが、他の福音書より少し後になって書かれたこともあって、当時の様々な信仰的立場の中で、「イエス・キリストこそが勝利者であり、まことの主である」との信仰を、しっかり教会の中に確立するという明確な意図をもって書かれた福音書だと思います。

ですから、この書の書き出しは「初めに言(ことば)があった。言葉は神と共にあった。言は神であった」という、明確にキリストを証しする言葉から始まっているのです。

この序文にあたる部分は、後に、クリスマスの時期にでも取り上げたいと思いますが、今日は、1章19節以下の、洗礼者ヨハネ(バプテスマのヨハネとも云う)が、イエス・キリストについて証したその部分をご一緒に学びたいと思います。

この洗礼者ヨハネは、この福音書を書いたヨハネとは、全然別人です。この洗礼者ヨハネは、イエスさまが公の活動を始める少し前から、ヨルダン川付近の荒野で、人々に「悔い改めの説教」をして、悔い改めのしるしとして、バプテスマ(洗礼)をさずけていた人です。彼は、旧約時代最後の予言者とも呼ばれますが、他の福音書によると、「らくだの毛衣を着、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた」と記されているように、風変わりないで立ちで、禁欲的な生活をしながら、救い主(メシア)の到来を待ち望み、その備えとして、悔い改めのバプテスマを授けていたのです。

そのヨハネのもとに、エルサレムのユダヤ人たち(これはエルサレムの権威ある最高議会を意味します)が、祭司やレビ人、またファリサイ派の人々(24)まで遣わして、「あなたはどなたですか」と質問した、というのです。「あなたはどなたですか？」私は、どうもこの訳は丁寧すぎると思います。当時のエルサレムの最高議会は、相当の権威をもっていましたから、「お前はだれだ」「お前は何か」という尋問だと思います。いったい何の権威で、人々に悔い改めを迫ったり、バプテスマを施したりしているのかという詰問だと思います。この最高議会の議員たちは、のちに、イエスさまにもそのように問いかけ、十字架につけるために引き渡したのです。

ヨハネは、そのような問いに「公言して隠さずに」語ったのです。つまり、少しも臆することなく、堂々と語ったのです。イエスさまもそうでしたが、バプテスマのヨハネも、どのような権威をも恐れず、人の圧力や批判にひるむことなく、相手が誰であろうと、堂々と、語るべきことを語り、為すべきことを為したのです。神を神として崇め、神のみを恐れ敬う人は、どのような人をも何物をも恐れないのです。

バプテスマのヨハネが、まずはっきりと公言したことは、「わたしはメシアではない」ということです。当時、自称メシアを名乗って、人を騙したり、騒動を起こすようなことが、よくあったようです。エルサレムの最高議会は、そのような騒ぎを取り締まる目的で、祭司やレビ人たちを遣わしたのかもしれませんが。

ヨハネの口から「メシアではない」と聞いて、彼らは少しホッとしたかもしれませんが、しかしなお疑問が残ります。「それでは何ですか。あなたはエリヤですか」と尋ねました。エリヤとは、旧約時代初期の予言者ですが、メシアが到来する時に、その先駆者として、エリヤが天から遣わされるという言い伝えがあったのです。「違う!」(私はエリヤではない)と、ヨハネが答えると、質問者は、さらに、「あなたはあの預言者ですか」と問うたのです。「あの預言者」とは、モーセのことのようです。モーセもまたいつかこの世に来て、十戒によって人々を裁かれるという恐れがユダヤ人たちの間にあったのでしょう。ヨハネはこの問いに対しても、「そうではない」と否定したのです。

最高議会から遣わされた人々の3度の質問は、何とか言葉じちをとらえて、ヨハネの活動を抑え込もうとするこの世の権力の圧力です。彼らはさらに「それでは一体、あなたは誰なのか。自分たちを遣わした人たちに、どのように返事したらよいのか。あなたは自分を何だというのか」と問いかけています。ここには、問う者の焦りといらだちがみられます。ヨハネの真実な否定の前に、問う者が逆に問われているのです。

バプテスマのヨハネは、ここで「わたしはメシアではない」、「違う」、「そうではない」と、自分について3つの「No!」という否定の言葉で、「わたし何者でもない」「後から来られるイエスこそ真の救い主だ」ということを証ししているのです。真実を証しするためには、ストレートに直接的に真実を指し示す方法と、違うものを違うと、はっきり否定することによって、真実を証しする方法があると思います。ヨハネの証しは、まず自分を否定することから始まっているのです。

「あなたは自分を何だと言うのか」この最後の問いに答えて、ヨハネは、「わたしは荒野で叫ぶ声である」(23)と答えています。これはイザヤ書40章からの引用で、昔イスラエルが、バビロンに捕らえ移されていた時、「慰めよ、我が民を慰めよ」という天からの声と共に、「呼びかける声がある。主のために、荒野に道を備え、わたしたちの神のために、荒地に広い道を通せ」(3)という、解放を告げる言葉が与えられたのです。ヨハネはこの神の言葉から、自分のことを「わたしは荒野で叫ぶ声である」と語ったのです。「やがて主が来られる。私は、そのために道を備えよ!と叫ぶ荒野の声だ」というのです。

「声」は、大事なことをみんなに告げ知らせる手段ですが、声そのものはあとに残らず、消えていくものです。バプテスマのヨハネは、自分をそのような「荒野の声である」と語ることによって、「私に注目せず、私の語る言葉を通して、私が証しするまことの救い主に注目せよ」と、訴えているのです。ですから27節では「その人は、わたしの後から来られる方で、わたしはその方の履物のひもを解く値打ちもない」と語っています。当時の履物は、紐のついたサンダルのようなものでした。そのサンダルの紐を解いて足を洗うのは、その家の僕(奴隷)の仕事でした。ヨハネは、後から来られるイエス・キリストこそ私の主であり、私はその僕にも値しない、と言うのです。

ここには、バプテスマのヨハネの徹底した自己否定の姿が描かれています。しかしその自己否定は、単に消極的な謙虚さを示すものではありません。来るべきイエス・キリストの偉大さの前に、自分がいかに小さな存在であることを示す告白です。ヨハネは、このように、自分をとるに足りない者として否定することによって、実はイエス・キ

ストを、より大きな存在として証ししているのです。

そのことを示すのが、後半の 29 節以下の箇所です。この箇所は「その翌日」の出来事とされていますが、主イエス・キリストがヨルダン川のヨハネのもとに来られた時のことです。ヨハネは、この主イエスを見かけるなり、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」と叫んだのです。そして「この方こそ私が待ち望んでいた方であり、この方のために私はバプテスマを授けてきた」と積極的にイエスさまを証ししたのです。

このヨハネ福音書にはなぜか、イエスさまがヨハネから洗礼を受けたということは記されていませんが、他の共観福音書によると、主イエスはヨルダン川にやってきて、ヨハネからバプテスマを受けられたことが記され、主イエスが「水の中から上がられるとすぐ、天が裂けて、聖霊が鳩のように降り、『これは私の愛する子、私の心に適うもの』という声が天から聞こえた」(マルコ 1:9-11)と記されています。ヨハネ福音書では、バプテスマのヨハネの証言として、「わたしは、聖霊が鳩のように天から下ってこの方の上に留まるのを見た」(32 節)と記され、「わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証しをしたのである」(34)と説明されています。

バプテスマのヨハネの証しは、徹底していました。35 節には、「その翌日」にも、ヨハネが二人の弟子と一緒にいた時、歩いておられるイエスさまを見かけて、「見よ神の小羊だ」と叫んで指さしたのです。「二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った」と記されています。師であるヨハネが、何度も熱心に、イエスさまを指さし、「見よ、神の小羊だ」「この方こそ神の子だ」と語るものですから、ヨハネの 2 人の弟子までが、師のもとを去って、主イエスの弟子になったというのです。普通なら、自分の弟子が自分を離れ、他の人の弟子になったら、とても寂しい思いがして、相手を妬んだりするところでしょうが、ヨハネは、妬むどころか、この後の 3 章 30 節を見ると、大勢の人が主イエスのもとに集まっていることを聞いて、「わたしは喜びで満たされている」と語り、「あの方は栄え、わたしは衰える」と言っているのです。イエス・キリストが栄え、そのみ名が崇められるならば、私が衰えることは、むしろ本望だ、というのです。

ここに、キリストを証しする者の基本的な姿が描かれているように思います。私たちキリスト者は、それぞれの場で、イエス・キリストを証しするために召されている者です。キリストを証しするということは、自分を主張し自分の利益や名声を求めるのではなく、むしろ自分を捨てて、イエス・キリストの名があがめられ、栄光が神さまに帰せられることを求めることです。

伝道者につきまとう誘惑は、自分の名があがめられることを求め、自分が権威ある者のように振舞ってしまうことです。私が神学生であった時、台湾の教会から一人の中年の牧師が留学生として来られました。学校での礼拝の時に、その方がこんな証しをされました。「自分は、台湾のある教会で 10 数年働き、多くの受洗者を生み出し、その教会を大きくして、そこを辞める時には、たくさんの人が泣いて別れを惜しみ、次の任地にまでついてくる信徒もあった。それが自分の誇りでもあり、励みにもなっていた。そのことを、ある先輩牧師に語ったら、『あなたの伝道は失敗でしたね』と言われた。『どうしてか』と尋ねると、『あなたがみんなから慕われた分、みんなのイエスさまに結びつく思いを奪ったのではないか。伝道は、自分のファンを造ることではなく、

人々を主イエス・キリストに結び付け、自分は影のように消えることだ』と言われて、大変ショックを受けたというのです。そのことを契機に、もう一度自分の信仰を問い直し、牧師として新たに出直したいと思い、留学生としてこの神学校に来ました」。

私はそれを聞いて伝道者になることの厳しさを改めて深く思い知らされました。これは、伝道者・牧師だけの問題ではないと思います。イエス・キリストと出会い、イエスさま証ししようとするすべてのキリスト者の課題ではないか、と思います。私たちは、自分を証し、自分が人から認められたり、褒められたりするために、イエスさまから呼び出され、救いにあずかったのではありません。「見よ、神の小羊」とキリストを指し示す「指」に徹するためです。

「神の小羊」とは、私たちの罪のために犠牲として神に捧げられた小羊のことです。御子イエス・キリストは、私たちの弱さと罪を担って、まさに「神の小羊」として、十字架の生涯を全うされ、復活されました。その恵みによって、私たちは贖われ、救われたのです。私たちは、そのような神の愛と恵みに感謝しつつ、自分を捨てて、十字架を負って主に従い、常に主イエス・キリストを証しするものでありたいと願います。

アーメン